

地域で頑張っています！ ～ユース審判員編～

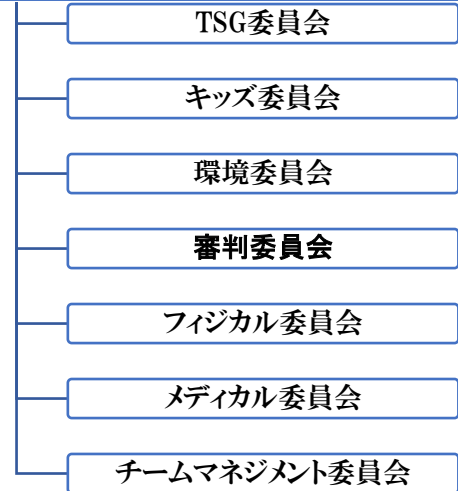
“審判の専門部がある高校があるらしい。”
そんな情報を聞きつけて、今夏の千葉県チャンピオン、市立習志野高等学校にお話を伺ってきました。

市立習志野高等学校サッカー部には、キッズ、環境、フィジカルなどいくつかの委員会があり、審判委員会もそのうちの1つとして活動を行っているそうです。部員はいずれかの委員会に加入することとなっているようです。

審判委員会の主な活動としては、県リーグでの主審、副審、競技規則改正関連の知識を他の部員へ伝達するほか、キッズコミット、中学年代、障がい者サッカーの試合の審判などが主な活動だそうです。

審判委員会で委員長と副委員長をされている祝部(ほうり)楓さんと、鈴木勇太さん、そしてこの日行われていた県リーグで副審を務めていた石井大暉さんと五味大地さんに、それぞれお話を伺わせていただきました(文中敬称略)。

市立習志野高等学校サッカー部



～ 習志野高サッカー部の組織図 ～

— いくつかの委員会活動の中から審判委員会を選んだきっかけは？

祝部: 中学の頃から審判をしていて、面白いな、と。

鈴木: 最初の希望はほかの委員会だったのですが(笑)、でも実際に審判をしてみると、その奥深さを感じています。

— 審判委員会の活動について教えてください。

祝部: 県リーグのそれぞれのカテゴリーで実際に審判を行うほか、平日に不定期ですが、随時1年生に動画などのシーンを活用して競技規則の講習を行っています。大抵の1年生が審判資格を取得するのは、1年次の終盤の時期で、公式戦の審判は2、3年生で行っています。また、学期末に、各委員会の活動報告の場で、部員から競技規則の質問に対応したりしています。

鈴木: 1部や2部リーグでは、副審ですが、Cチームが所属する4部では、主審を行うこともあります。

— 審判を始めたのはいつからですか？

石井: 高校に入学してからです。

五味: 中学で部員全員で取得してからずっと更新しています。

— 主審をする、というのは何か特別なものがありますか？

石井: ファウルをジャッジするのが、正直怖いです。

五味: 主審は、斜めに動いて、副審も、選手も見て、というのが難しいな、と思います。

祝部: アピールの声とか、プレッシャーが違いますね。

— それはベンチからの？

鈴木: いえ、選手からのです。でも、いいジャッジは褒めてもらえますし、そういうやり甲斐や魅力はあります。

— 審判の魅力って、どんなところに感じますか？

鈴木: 判定するのはとても難しいと思うのですが、オフサイドやファウルの見極めが出来た時の快感ですね。

祝部: 審判をすることによって、サッカーの見方が変わってきて、(審判をする時に)何を見なくてはいけないのか、自分がプレーする時と考えることが全然違う、という新たなサッカーに対する引き出しが増えて面白いです。

石井: 審判をしていて、いい判断をしてベンチや選手から“ナイスジャッジ！”と褒められた嬉しい経験は私もあります。

五味: 私は公式戦で主審をした経験はありませんが、副審としてオフサイドをきっちり見極められた時は、ヨシッ！という充実感を得られます。

将来、さらに上級を目指して審判としてJリーガーには？という問いかけには、審判の任務に感じるプレッシャーを理解しているせいか、なかなか積極的な意欲は聴かせていただけませんでした。皆さんそれぞれ高校を卒業する来春後もサッカー、そして審判を続けていきたい、と答えてくださいました。

千葉県では、2種委員会の方針のもと、高校年代のユース審判員が多く誕生し、現場で実際に審判を行ってその任務の重要性に対する理解も広がっていますが、昨年度の調査では高3世代の95%が審判資格を更新せずに失効している、という厳しい現実もあります。取材を通じて、将来もサッカーに関わる意向を示す人が多い中で、審判にさらなる理解を示して、こうしたすがすがしいナイスガイの仲間の中から、審判資格も、活動もできれば継続して、将来の千葉県や日本のサッカーを審判で支えてくれる人材が現れてくれるといいな、と思いました。



五味さん(左端) と、石井さん(右端)



祝部さん



鈴木さん